

吉阪隆正日記解読と分析

—吉阪隆正とアトリエ ル・コルビュジエ従事者を中心とした交流分析—

主査 中谷 礼仁*¹

委員 湊 明人*², 齊藤 祐子*³, 池田 理哲*⁴

本研究では建築家 吉阪隆正(1917-80)が 1950 年から 2 年間に渡って行ったフランス留学中の日記帳を対象として、その悉皆的な解読と調査を行った。書誌情報や資料性格を明らかにし、さらに記述内容の整理を行った。これまで、吉阪の留学期については、建築家 ル・コルビュジエ(1887-1965)との関係が多く注目され、吉阪個人の活動が相対的に注目されてこなかった。よって本研究では、吉阪自身の活動のありようを軸として、アトリエ ル・コルビュジエの従事者との関係を再検討し、新たな事実を抽出した。また特に彼の留学期に形成された普遍的集住観について検討し、在仏期間が吉阪に与えた影響を考察した。

キーワード：1) 吉阪隆正, 2) ル・コルビュジエ, 3) 日記研究, 4) 弟子研究, 5) 読み下し,
6) 日記解読, 7) 戦災復興, 8) 人的ネットワーク, 9) 都市計画, 10) 住居学

DECIPHERING AND ANALYZING THE DIARY OF TAKAMASA YOSIZAKA

-Exchange analysis focusing on Yosizaka and people related to Atelier Le Corbusier -

Ch. Norihito Nakatani

Mem. Minto Minato, Yuko Saito, Michisato Ikeda

In this study, we conducted the first complete decipherment and investigation of the diary of architect Takamasa Yosizaka during his study in France from 1950 to 1952. The vast amount of information in the diary was then organized to clarify the bibliographic information and material characteristics. Until now, much attention has been paid to Yosizaka's period of study abroad as a student of architect Le Corbusier, but Yosizaka's personal activities have not received much attention. Therefore, this study focuses on Yosizaka's own activities and examines the universal view of living together formed during his study period and the human network centering on Yosizaka in France to clarify the impact of his study in France.

1. はじめに

1.1 研究の目的と背景

本研究の目的は、建築家 吉阪隆正 (1917-80) の在仏時、1950 年 8 月から 1952 年 10 月までの約 2 年間にかけて記された日記帳 4 冊 (以降、在仏日記) と同日記内の挿入資料の解読を行い、もって今後の住生活文化への指針、ならびに 20 世紀中盤のアトリエ ル・コルビュジエ従事者との交流を中心とした、彼の渡仏時の活動ならびに人的ネットワークの性格を明らかにすることである。類似研究も既に散見されるが (参照: 1.2), 吉阪の在仏時の活動を詳細に記録した基礎資料である在仏日記 (早稲田大学蔵) はこれまで悉皆的な解読と分析が為されてこなかった。同日記を所蔵する研究機関に所属する身として、その内容の精査と公開に向けての努力は必須であると考えた。

また住生活文化への指針として、吉阪は留学を通じて、第二次世界大戦後の社会、中でも社会的要請として現れていた「集住」を広く観察し、その学習を自身の論や建築活動に反映している。この事から、今回の在仏日記の集解調査に伴いあわせて「集住」に関する記録について分析考察を行った。

また、吉阪の活動の舞台となった、アトリエ ル・コルビュジエでは、当時《マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン (1947 年着工)》^{注1)}、《チャンディガールの建築群 (1950 年着工)》^{注2)}、《ストラスブルグ 800 戸のための設計競技 (1951 年計画開始)》^{注3)} など、設計活動が活発化、多様化しており、アトリエ内の従事者たちは、その設計手法の構築に参与し、影響を互いに与えていたと考えるべきである。これは建築設計プロセスの重要な一端であり、吉阪隆正の在仏日記の内容はその見地からも、またとない一

*¹ 早稲田大学 教授 博士 (工学) *² 早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻 修士課程 *³ サイト一級建築士事務所 代表 *⁴ 早稲田大学 助手 博士 後期課程

級資料でもある。

以上の事から本研究では、吉阪自身の活動のありようを軸として、アトリエ・ル・コルビュジェの従事者との関係を再検討し、新たな事実を抽出した。また特に彼の留学期に形成された普遍的集住観について検討し、在仏期間が吉阪に与えた影響を考察した。



図1-1 アトリエ・ル・コルビュジェの仲間と。一番右がインドの Balkrishna. V. Doshi。座っているのが、ギリシアの Iannis. Xenakis。
(吉阪隆正アーカイブ早稲田大学蔵より。以下掲載図版は特記なき限りは全て同アーカイブからである。)

1.2 先行研究と本研究との関係

●吉阪在仏期に関する既往研究

吉阪の在仏期に関して、自筆の言説を取りまとめた吉阪隆正集の他に、吉阪の書簡等を対象として、在仏期の活動の復元を試みた論文が見られる。いずれの論文でも在仏日記の全体的な紹介はなされておらず、本研究では在仏日記から新たな視座を獲得する事を目指した。^{注4)}

・吉阪隆正集全 17 巻、勁草書房、1985

吉阪没後に彼の教え子を中心に編まれたものであり、吉阪の基礎文献である。各巻ごとのテーマにそって、主に公刊された 498 本の文献と資料類を再録している。吉阪の在仏日記もテーマに従って断片的に紹介されているが、その全体は未収録である。

・倉方俊輔、山名善之「吉阪隆正の住宅・都市理念に関する研究」、住宅総合研究財団研究論文集 34 巻、pp. 361-372, 2008

当論文は吉阪隆正の早稲田大学入学（1938 年）から渡仏後（1952 年）までの彼の住宅・都市理念の変遷を扱っている。渡仏前は論文・著作・コンペ案を参考資料とし、在仏時については、吉阪隆正が妻に宛てた書簡や吉阪隆正の著書を参考資料とした。当時吉阪家に保管されていた旧蔵資料を総覧した点、吉阪の建築思想の変遷が通覧的に扱われた点に大きな意義がある。しかしながら、本研究で扱う吉阪隆正の在仏日記は当時の閲覧上の制約もあり、資料として直接的に参照されていない。

また当論文はアトリエ内の交流関係において、ル・コ

ルビュジェから受けた影響を中心としてのみ論じている。

対して本研究では、在仏日記全体を対象とし、アトリエ内外の吉阪のより広い人的・文化的交流を明らかにした。

・倉方俊輔『吉阪隆正とル・コルビュジェ』、王国社、2005

当文献は上記論文の対象時期に加えて、帰国後の建築活動まで扱っている。その内容は吉阪隆正の活動における建築作品や建築理論、さらにル・コルビュジェからの影響を中心として紹介し、論じた。本研究と、場所と時期が重複する重要参考文献である。ただし、同著者の上記論文と同じく、本研究が対象とする在仏日記の記述内容は、部分的な紹介にとどまっている。

●吉阪在仏日記内記述を直接的に参照した既往研究

本研究の対象資料である在仏日記を直接的に参照した既往研究も一件見られる。アトリエ・ル・コルビュジェ内での吉阪の担当プロジェクトの特定を目的として利用されており、膨大な在仏日記記述の一部分を紹介するものである。本研究では悉皆的な記述の解釈を行い、アトリエ外まで含めた留学の全貌を明らかにした。

・福田京、島崎絵里、谷川大輔、山名義之「アトリエ・ル・コルビュジェにおける吉阪隆正のプロジェクト担当箇所の特定と考察—設計図面及び日記の調査をとおして—」、日本建築学会大会講演梗概集、2008

当論文は、ル・コルビュジェ財団（Fondation Le Corbusier、以降 FLC）に保管されている設計図面と在仏日記を対象資料として、吉阪がアトリエ・ル・コルビュジェ在籍時に進行していたプロジェクトにおける、吉阪の担当箇所を特定している。設計図面の作成者情報等を網羅的に整理し、在仏日記から抽出した設計に関する記述と照合することで、それまで判明していなかった担当箇所を特定したことに意義がある。当論文において在仏日記は、設計図面から判明した情報が不足している場合に参照する補助的な役割を果たしており、設計の思索内容などについては論じられていない。また、在仏日記の解釈についても、アトリエに関係のない文章については未完了である。そのため本研究では、日記帳を網羅的に解釈し、その上で吉阪在仏留学の側面としてアトリエ・ル・コルビュジェ関係の経験と同等に、吉阪の旅や個人的学習・文化交流などに着目した。

1.3 対象資料について

本研究の対象とする資料は、吉阪隆正が留学期間中に記した日記帳全 4 冊である。本資料は、2015 年に吉阪家資料が早稲田大学に寄贈されるまで、別所蔵先にあり未公開であった。現在は早稲田大学建築学科を通じて、閲覧可能となっているが、2021 年に本組織が解釈を開始するまではその書誌学的分析・悉皆的読解については、手つかずの状態であった。日記帳には頁間に挟み込まれた

た資料（以降、挿入資料）が存在するが、これも日記帳の重要な要素として認め、研究を行なった。以下に「在仏日記」と「挿入資料」のそれぞれについてその概要を記す。

1.3.1 在仏日記の概要

在仏日記は1950年8月23日から1952年7月29日までの707日間の期間に記された物である。その期間のうち、記録が残された日は、約84%の594日間であり、113日は未筆であった。見開きの右側頁に初年度分を書き、左側頁に翌年の同月日分を書く「2年連用日記」という方法を取っている（表1-1）。

また、吉阪は留学期にA4判大学ノート3冊と、フランスで購入したB5判ノート2冊に日記を残した事が参考文献より分かっており注5)、本研究の対象資料は最後の期間を記した1冊を除く4冊に当たる。先行研究文1) (2007年公開)より「(前略)留学中の日記はA4ノート3冊、B5ノート2冊であるが、2008年2月現在、1952年7月28日から帰国までを記したB5ノート1冊が紛失している」と指摘されており、現在もその存在が確認できていない。この紛失された1冊のノートには、吉阪の留学期間であるマルセイユへ向う船に乗船する1950年8月23日から日本に帰国する1952年11月21日注6)のうち、1952年7月30日から帰国までの約4ヶ月間が記されていると思われる。

1.3.2 挿入資料の概要

在仏日記内の挿入資料は、1冊目36資料、2冊目22資料、3冊目24資料、4冊目137資料の計219の独立した紙片等からなる。その内容は手紙やメモ、スケッチ、切符など多岐に渡り、当時の吉阪やアトリエル・コルビュジェの様子を知る上で重要な資料となる。

表 1-1 吉阪隆正在仏日記概要表

冊	各部名称	見開きページ数	各部該当年月日	
			1L	1R
①	1L 1R	38ページ	1951/08/23 1951/09/22	1950/08/23 1950/09/22
②	2L 2R	39ページ	1951/10/02 1951/11/30	1950/09/23 1950/11/30
③	3L 3R	42ページ	1951/12/01 1952/01/28	1950/12/01 1951/01/28
④	4L 4R	126ページ	1952/01/29 1952/07/29	1951/01/29 1951/08/21

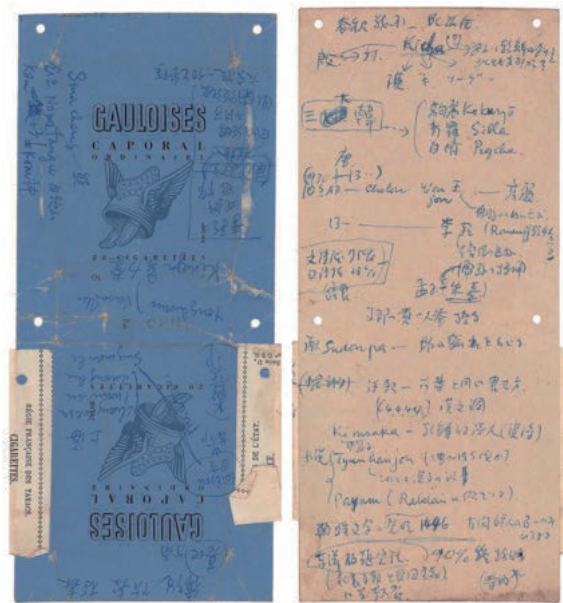


図 1-4 挿入資料例



図 1-2 吉阪隆正在仏日記表紙

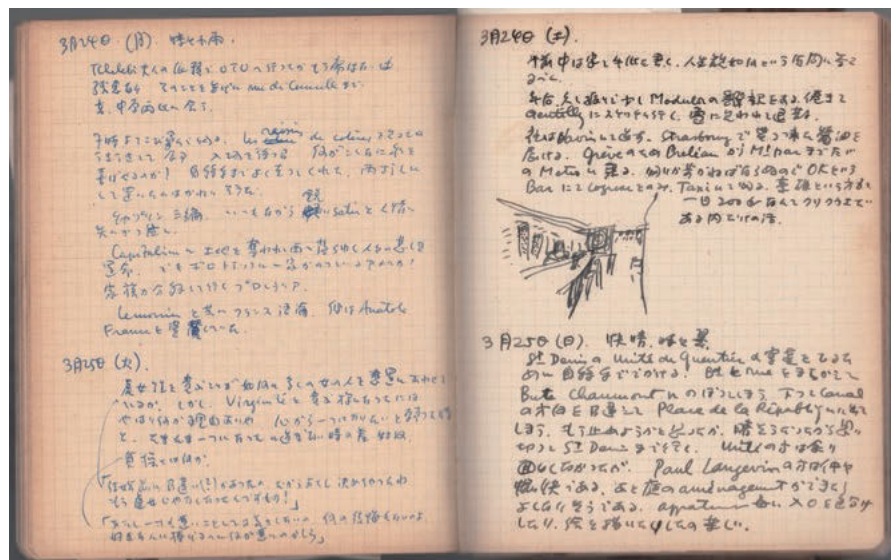


図 1-3 在仏日記本文の例（右頁 1951/3/24, 25, 左頁 1952/3/24, 25）

1.4 本研究の方法

研究を始めるにあたり、まず対象資料の解読を開始した。在仏日記は手書きのため、慎重な読み下しが必要となった。この読み下し成果にもとづき、在仏日記と挿入資料について調査及び整理を実施した。それぞれの詳細な方法について以下に記す。

1.4.1 資料の電子アーカイブ化

在仏日記は、紙製のノートであり、経年による劣化が心配された。研究を行う上で、スキャナーを用いて、全頁の電子アーカイブ化を行なった。日記帳内に存在する挿入資料も存在した頁数の情報が抜け落ちないように留意した。

1.4.2 対象資料の解読

在仏日記の記述の読み下しを行った。全体に対する基本的な解読を研究協力学士とともにを行い、その上で難解な記述や仏語による記録に対して、川上夏林氏(理論言語学・フランス語学)による言語分析と、建築史的コンテキスト分析の双方によってさらに読み下しを精査した。これによって、これまで未検討であった日記の意味が認識可能になる事を期待した。読み下しにはルール^{注7)}を設け、その上で定期的に会合を持ち、解読結果の精査を進めた。

1.4.3 在仏日記調査および整理

上述した解読作業により獲得した基礎資料を、時系列ならびに主題(カテゴリ)により、分析整理を行なった。つまり、在仏日記の全体的な性格を把握するために、記述内容をカテゴリに分類し、リスト化する事で整理を行なった。日記に登場する記述の頻繁度によって、AからIのカテゴリを設けた(表1-2)。日毎の記述内容から該当するカテゴリに印をつけ、それを週毎に纏めた(表1-3)。これにより日記帳が持つ記述の全体的な性格と、時期による記述内容の変化が読み取れる事を期待した。また、日記本文内に登場する人物名・地名・作品名等の固有名詞については可能な限り網羅的に調査を行なった。

表1-2 在仏日記カテゴリ表

カテゴリ	内容	カテゴリ	内容
A 備忘録	寝食の記録等の日常的な記述	F ル・コルビュジエについて	ル・コルビュジエに関する意見等
B 思索	思う・考える	G アトリエル・コルビュジエの従事者に関する記述	アトリエル・コルビュジエ従事者らとの交流等
C 学習記録	読書・映画・展覧会等の記録	H アトリエル・コルビュジエ計画進行	アトリエにおける計画進行の記録
D 旅の印象	旅路の景色等の記録	I ル・コルビュジエの発言録	ル・コルビュジエの発言に関する意見等
E 交友関係	吉阪のあらゆる交友関係		

1.4.4 挿入資料調査および整理

挿入資料についても在仏日記と同様に、人物名・地名・作品名等の固有名詞について網羅的に調査を行なった。また、挿入資料の全体的な性格を把握するために、資料の

種類をカテゴリに分類し、リスト化する事で整理を行なった。設けた11個のカテゴリは以下の通り、①書簡、②原稿、③領収書、④新聞切り抜き、⑤チケット、⑥パンフレット、⑦スケッチ、⑧メモ、⑨招待状、⑩メニュー表、⑪その他とした。更に各資料の資料概要を作成し、印刷方法等の媒体形式と併せて並列することでリスト化を行なった。

2. カテゴリ分析

2.1 在仏日記について

2.1.1 日記カテゴリ分析による在仏日記の性格

先の1.4.3における日記のカテゴリ毎の記述数は降順に、A: 備忘録(594件)、E: 交友関係(486件)、B: 思索(394件)、C: 学習記録(363件)、H: アトリエル・コルビュジエ計画進行(189件)、G: アトリエル・コルビュジエの従事者に関する記述(134件)、F: ル・コルビュジエについて(111件)、D: 旅の印象(76件)、I: ル・コルビュジエの発言録(53件)となっている。必ず書かれている備忘録を除けば、交友関係が最も多く、吉阪の人物交流の多さが窺える。アトリエル・コルビュジエに関係する記述(H+G+F+I)も487件と多く、本研究の目的の一つである、アトリエル・コルビュジエの様子や従事者たちの交流を見るために十分有効な資料と言える。また吉阪の留学活動を「仕事・学習」「交友関係」「旅」と捉えると、いずれの項目においてもアトリエ外の活動が多い(表2-1)。よって、本資料はアトリエ内での吉阪の活動と同等に、アトリエ外での活動を知り得る資料としても有効であると言える。

表2-1 在仏日記記述内容分析表

	アトリエ外	アトリエ関係
仕事・学習	363(C)	176(H)
交友関係	353(E-G)	133(G)
旅	62	14

2.1.2 記述内容の推移

ル・コルビュジエ関係に関する記述の推移を見ると、後期に向かうにつれて、減少傾向にある事が分かる。対して思索の記述は一貫して続いている。また、既往研究²⁾によると、留学後期に向けて、住居学等を発展させる目的の旅を多く行っていた事から、吉阪の関心の推移が伺える。

更に、ル・コルビュジエ関係の記述の中でも、計画進行に関する推移では《〈ロク〉と〈ロブ〉》^{注8)}と《ストラズブルグ800戸のための設計競技》、《マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン》の担当時期に記述が増加している事が分かり、対して《ナント・ユニテ・ダビタシオン》^{注9)}の担当時期には顕著に記述が減少している。《ナント・ユニテ・ダビタシオン》における吉阪の仕事はその多くが

基本計画ではなく、実施設計が主であり、記述内容も記録的で議論を含まない事が多い。

比較して計画進行の記録の多い三件のプロジェクトについては、同時に学習記録と交友関係、思索が増加している。この事から吉阪が進行を多く記録したプロジェクトにおいて自発的に多くの研究や学習を人物交流の中で行なっていた事が判明する。特に《ストラスブルグ 800 戸のための設計競技》では、初期の計画段階から携われる事に高い意欲を示している。それを裏付ける日記本文を以下引用する。

「Strasbourg の基本計画を進める、考えて見ると日本と同じ位小さい、アメリカの例を持って来るとべらぼうに大きい、今パリーの大部分の人の住んでいる住宅、は図の様なもの、家族は夫婦に子供 2~3 人便所のないのが多い、便所は階段室に共通でついている、廊下のあるのは 3 室のものの方に多い、30~40 m²だから日本といふ勝負である、Humanité には一室住居、子供 6 人の例が 11 区に多いとあつた、ねる時は部屋の真中に机を置いて右は女左は男とするのだそうだ、Bed がなければ床の上にねるのだと、Aris の所は一室で 4 人、民家の調べをしていても決して日本よりよいといえない、畳のないだけいけない、」(在仏日記 1951/3/8)

「Strasbourg に 10ha 程の敷地に 800 戸を入れる計画の concours あり、7 月 1 日を期限とす、これに過去 20 年の業績を集中したとのこと、まとまつた一つの Bloc の全体計画、(見積に至るまで) を行う機会にぶつかつたことは何という幸運であろう。」(在仏日記 1951/2/17)

更に、アトリエ従事者たちと計画敷地に赴くなど、能動的に学習を行なった記述が見られる事等からも、この計画への高い関心が伺え、記述内容の推移との相関が理解できる^{注10)}。

2.2 挿入資料について

2.2.1 カテゴリ分析による挿入資料の性格

先の 1.4.4 におけるカテゴリ毎の資料数は降順に、⑧メモ (45 件)、⑪その他 (41 件)、③領収書 (31 件)、①書簡 (30 件)、⑤チケット (27 件)、⑥パンフレット (18 件)、⑦スケッチ (14 件)、④新聞切り抜き (11 件)、⑨招待状 (9 件)、⑩メニュー表 (8 件)、②原稿 (3 件) となっている。カテゴリ件数の総和が 237 件となっており、これが挿入資料の資料数 219 件を超えているのは、一つの資料で 2 つのカテゴリに属する資料が複数存在するからである。(パンフレットの上にスケッチが書かれている資料は⑥⑦両方のカテゴリに属するため。)メモが最も多い事から、挿入資料は出来事に対してとっさにとった記録を保存するために挟み込まれた資料としての性質が強い事がわかる。

これは挿入資料に描かれたスケッチに対しても同様である。吉阪は留学中スケッチブックを日記とは別に持

ち歩いていた事は知られているが^{注11)}、それとは別のスケッチが挿入資料上に存在することになる。また、チケット、パンフレット、新聞切り抜きは吉阪の留学における日常的な活動を示すものである。

2.2.2 挿入資料における各カテゴリ毎の特筆すべき資料の紹介

挿入資料は在仏日記と異なり、吉阪本人の記述を含まないものが多い(電車のチケットなど)。したがって、本項では、各カテゴリ毎に特徴ある資料を紹介する。

【書簡】書簡の差し出し元は日本で交流のあった人物が目立つ。その中には早稲田大学で交流のあった菊竹清訓との関係が読み取れるものも存在した。また、アトリエル・コルビュジエの従事者達から書かれたものも散見された。

【原稿】原稿は、「[日] 安東勝男「浅草見番」の原稿」、「[仏] 吉阪隆正による安東勝男「浅草見番」の仏抄訳文」、「[日] 吉阪隆正執筆の、雑誌『国際建築』の寄稿文原稿」の全 3 件であった。

【領収書】領収書は吉阪が数多く行なった旅の際のホテルの領収書が目立つ。またその他には、Velo Solex という原動機付き自転車の部品修理領収書なども確認できた。

【新聞切り抜き】《マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン》に関する記事の切り抜きが目立つ。日本語の新聞の切り抜きも僅かに見られるが、殆どが仏語による新聞記事であった。フランス国内での最新の評価やそれを巡る工費や戦災復興の進捗などについて書かれており、吉阪の関心が伺える。また、戦争に関する記事も見られ、中でも日本のアメリカによる統治体制に関する記事^{注12)}などが確認できた。

【チケット】多くが公共交通の乗車券である。パリ市内の物は見られず、殆どが旅に出た際のチケットであることから選択的に保存された事が分かる。また劇場や映画館などの鑑賞チケットも多く確認できた。

【パンフレット】ギャラリーや美術館などで展覧会を見る事が多かった吉阪はその際のパンフレットを挿入資料として残している。吉阪の日記帳内には展覧会の名前のみが記されている事が多く、吉阪が鑑賞した具体的な作品を知る事ができる重要な資料と言える。

【スケッチ】挿入資料としてのスケッチは紙切れに描かれたものが多く、その対象は殆どが人物であった。

【メモ】人物名や講演の内容、住所など内容は多岐に渡る。資料の媒体形式も紙切れの場合もあれば、タバコのパッケージや広告などの裏紙というように多様である。どれもその時に手元にあった紙類に即座にメモした印象を受ける。

【招待状】吉阪は複数の団体から招待を受けていた。その中でもパリ国際大学都市関係^{注13)}の会議への招待が多く見られる。在外国ベトナム人留学生会主催の講演会^{注14)}や考古学、都市計画に関する会議^{注15)}などに招待を受けている。

【メニュー表】日本からマルセイユに向かう船中でのレストランのメニュー表やオルセー宮のメニュー表などが確認できた。

3. 考察

本考察ではアトリエ ル・コルビュジエ内の活動のみならず、アトリエ外を含む広域な活動に対して考察を行った。先行研究の全ては目的的に日記帳を参照しているが、本研究では悉皆的な解読によって新たな発見を期待した。

3.1 吉阪隆正仏留学時の人的ネットワーク

本節では、留学期間を通して繰り広げられた吉阪の人的ネットワークの概要を明らかにした。吉阪は日記が書かれた全594日の内、486日に交友関係に関する記述がある事からも分かる様に、多様な分野の人物と頻繁に交流している。その交流は大きく三つに分類する事ができ、ここでは、そのそれぞれについて考察を行う。

1) アトリエ ル・コルビュジエ従事者・関係者との交流

本考察を始めるにあたり、アトリエ従事者の定義を明らかにしておく必要がある。本研究では、先行研究^{文1)}内「アトリエ所員名簿」(p. 142)に名前が載っている人物と、ル・コルビュジエが直接的に執筆に関わった2つの書籍^{文5) 文6)}に記された人物を従事者とした。

その上で、在仏日記と挿入資料(例: 図3-1)^{注16)}からは、①従事者 22名と、②上記記録には名前が残っていないが、日記本文などから従事者としての性質が新たに認められた人物 6名と、③アトリエへの直接的な関与は認められないが、複数のアトリエ従事者との重要な交流が認められた人物 1名との吉阪の交流が発見された。

(表3-1)

計29名の人物はフランス、ギリシャ、トルコ、コロンビア、インド、スイス、ウルグアイ、ポルトガル、パナマ、韓国の10カ国から集まっており、当時のアトリエ従事者らの多国籍性が窺える。以下、代表的な人物について解説した日記より紹介する。

吉阪との交流の記録が突出して多いアトリエ従事者は、28日間^{注17)}記録された建築家・Balkrishna V. Doshi (1927-2023, インド)、25日間^{注18)}記録された建築家・現代音楽家 Iannis Xenakis (1922-2001, ギリシャ)、21日間^{注19)}記録された建築家 Germán Samper Gnecco (1924-2019, コロンビア)、19日間^{注20)}記録された建築家 Aristoménis Provelenghios (1914-1999, ギリシャ)、18

日間^{注21)}記録された建築家 André Wogenscky (1916-2004, フランス) の5名である。

吉阪が盛んに交流したアトリエ従事者の特徴として、その出身が第二次世界大戦における被植民地であったり、当時「第三世界」と呼ばれた地域の出身であることが指摘できる。ただしフランス出身の André Wogenscky については、当時のアトリエ内主任建築家であった事から事務的な交流が多く、この限りでは無い。

西欧列強出身では無い彼らとは公私共に盛んに交流が行われた。Balkrishna V. Doshi と Iannis Xenakis とは自転車ですフランス国内を旅し^{注22)}、Germán Samper Gnecco とはコロンビアの民家形態について聞き取り、住居の形態について議論するなどしている^{注23)}。また、Aristoménis Provelenghios とは彼の自宅を複数回訪問し、その過密状態に大久保を思い出してスケッチしている(図3-2)^{注24)}。更に彼らとはル・コルビュジエの計画やモデュロール、CIAM に対する批判を盛んに行なっている事が読み取れる^{注25)}。

さらに、新たに吉阪との交流から従事者としての性質が認められた6名(表3-1内②)は、Noël (詳細不明)^{注26)}、Mme Jeanne (?、フランス)^{注27)}、Charles Barberis (1888-1980, フランス)^{注28)}、Vedat Ali Dalokay (1927-1991, トルコ)^{注29)}、Vieco (Hernán Vieco Sánchez か。)(1924-2012, コロンビア)^{注30)}、Costantine Andréou (1917-2007, ブラジル)^{注31)}である。

この事から、アトリエ ル・コルビュジエの従事者として既知の人物以外にも、在仏日記からは吉阪が、複数の人物とアトリエ内、ならびにその周辺で交流している事が判明した。

加えて、従事者とは認められないものの、複数の従事者との交流が見られる人物として(表3-1内③)、Claude Le Goas (1928-2007, フランス) が挙げられる。CEPA なる団体の関係人物であり、アトリエ従事者 Germán Samper Gnecco, Roger Salmons, Valentia らと共に CIAM 批判などを盛んに行っている^{注32)}。

先行研究に記録されていない彼らは、アトリエ関係者と断定することはできない。しかし、少なくとも数多くの既知の従事者と交流し、議論した記録が在仏日記に存在することから、アトリエ従事者、ひいてはアトリエ ル・コルビュジエの活動とも互いに影響関係にあったと考えられることができる。

以上の事から、書籍に記録の残るアトリエ従事者のみを対象とする事では、アトリエ ル・コルビュジエにおける人的ネットワークを分析する上で完全ではなく、ネットワークはそのアトリエ外にも広く展開していたと考えたい。

2) 在仏日本人との交流

吉阪の日本人との交流は、同じフランス政府給費留学

生として留学を果たした5名^{注33)}を始めとして、パリ国際大学都市内で多くの議論をした記録が目立つ。彼らとは異なる専門分野から相互に多くの意見交換を行っていた。その内容は私的相談から哲学、戦争、日本文化、装飾論、同性愛、住生活など多岐に渡る。

吉阪と交流のあった在仏日本人は各々が多様な専門を持っていた。桶谷繁雄(1910-1983)を始めとした科学者や、北本治(1911-1998)のような医者、後に吉阪の作品の依頼主になる数学者である浦太郎(1920-)などが見られる。更に交流の中で目立って見られるのは、画家との交流である。幼少期からの付き合いである荻須高德(1901-1986)や金山康喜(1926-1959)、田淵安一(1921-2009)、斎藤英一(生没年不明)らと交流し、触発されて油絵を描くなどしている。^{注34)}

さらに吉阪は留学中、午前中に国立図書館(Bibliothèque Nationale)を訪ね、フランス民家調査などの調べ物をし、午後アトリエにて仕事に努め、夕刻住まいに戻って、日本人らと議論をするという生活スタイルを高い頻度で取っている^{注35)}。この事からも、吉阪にとって、日本人との交流が留学生活の大きな部分として存在した事が分かる。

3) 在仏アジア人としての活動

在仏アジア人として、アジア等の西欧以外の出身者との交流も多く見られる。中でも在外国ベトナム人留学生協会(L'ASSOCIATION DES ÉTUDIANTS VIETNAMIENS A L'ÉTRANGER)との交流が見られる。吉阪は留学中、2度日本の住まいに関する講演を行うが、一つが在外国ベトナム人留学生協会主催の「日本の住まいと暮らし(Les Habitations et les Modes de vie au Japon)」という講演である。^{注36)}

更には、偶然に出会った中国人と各国の情勢や政治的立場、戦後社会について語っている。

「支那人(10日の夜 chalet du parc で知り会った)と世界情勢について語る、彼も金持であったが、日本の戦で1937-45年の間に乏しくなった、だから今は中共になつてかえって喜んでいると、支那は中共になつて統一ができたことを皆喜んでいるそして中共が統一するに到つたのは日本軍によつて、支那の家が平均化というより金持が没落したからだという、そしてヨーロッパの運命はあと50年、その理由の1は統一ができないから、2には植民地を近く失つてしまうから、3には機械が既に古く、生産力の低下をまぬかれないからといつていた、アメリカには物資のみあつて眞の文化財なきが故にもはやこゝで何かを生み出さねば今が絶頂である、従つてアジアの他にないと、アジアの立つ為には日本と支那とが一つにならなければいけないといつたら、その通りだといふ、大東亜共栄圏を1925年にそのまゝ唱えていたら実現したろうか、1943年では日本が、自らの説と逆の行爲をとつたあと

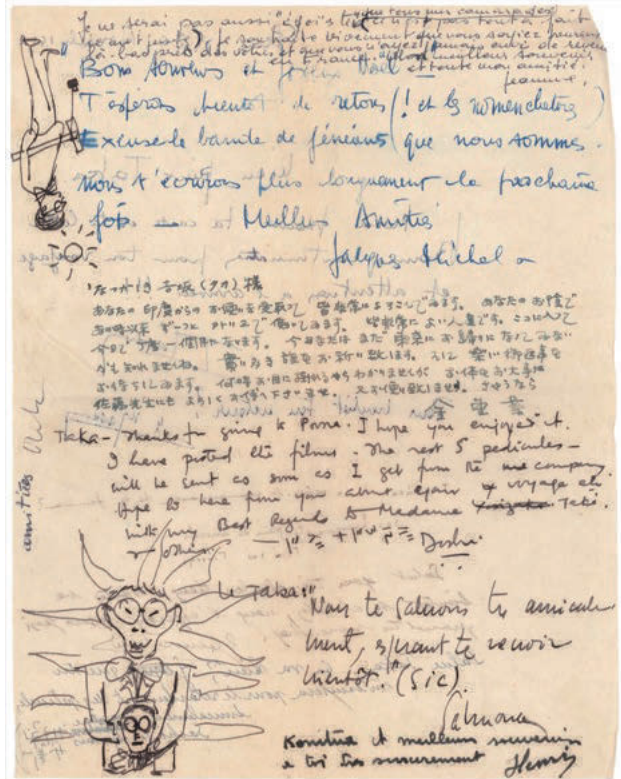


図3-1 挿入資料No. 4-103「アトリエル・コルビュジエ従事者からの寄せ書き」Chandigarh 訪問後に日本に帰国した吉阪宛への書簡で、総計11名^{注37)}が執筆している。「メリークリスマス そろそろ戻っていることでしょう。怠け者集団でごめんなさい。」(Jacques Michel) 「Tankaka. 奥さんのこと覚えていた? 幸せと成功がありますように。」(Iannis Xenakis) 等。

表3-1 吉阪在仏日記および挿入資料から判明したアトリエル・コルビュジエにおける従事者ならびに関係者一覧

人物名	在仏日記内交流日数	挿入資料内登場有無	出身国
① 先行研究・書籍で従事者として記録の残る人物			
Balkrisnas V. Doshi	28	有	インド
Iannis Xenakis	25	有	ギリシャ
Germán Samper Gnecco	21	—	コロンビア
Aristoménis Provelenghios	19	—	ギリシャ
André Wogenscky	18	有	フランス
Fernand Gardien	11	—	フランス
Georges Sachinidis	8	有	ギリシャ
Roger Salmons	7	有	コロンビア
André Maisonnier	7	—	フランス
Jacques Masson	6	有	フランス
Henri (Brutaux Henriか?)	6	—	不明
Jacques Michel	6	有	フランス
walter jonas	5	—	スイス
Valentia	5	—	コロンビア
Nadir Afonso	4	—	ポルトガル
Guy Lemarchands	4	—	フランス
Charles Clémot	3	—	ウルグアイ
Perez Chenis	2	—	パナマ
Roger Andréini	1	—	フランス
Olek Kujawsky	1	—	ポーランド
stieler	1	—	不明
金重業	0	有	韓国
② ①の記録には残らないが、日記本文等から従事者としての性質が認められた人物			
Noël	7	—	不明
Mme Jeanne	3	有	フランス
charles barberis	2	—	フランス
Vedat Ali Dalokay	2	—	トルコ
Vieco (Hernán Vieco Sánchezか?)	1	—	不明
Costantine Andréou	1	—	ブラジル
③ アトリエへの直接的な関与は認められないが、複数のアトリエ従事者との重要な交流が認められた人物			
Claude Le Goas	7	—	フランス

だからいけない、しかし共栄圏はつくるべきであると、」(在
仏日記 1950/11/3)

同様の在仏アジア人との交流が在仏日記内に複数件見られ、フランスでの吉阪の意識にアジアへの視線が多く存在した事が確認できる。

3.2 第二次世界大戦後の普遍的集住観

次に吉阪隆正が一貫して関心のあった「集住」についての考察の展開を紹介する。在仏日記において吉阪は、1951年3月10日、ストラスブルグで川の対岸にドイツを見てこのように記録した。

「Cath.を見に行こうとして、Valentiaに会う、共にRhine川まで行く、橋の向はドイツである、そこまで行く、私には去り難い気持がする、こゝはよくこわれている、Strasbourgの方はもう壊れたという感じはないのに、負けたのが悪いのだ、勝てば正しかったのだという様な感じが強くする、国境があるからいけないのだ、(中略)Cathedraleを見に行く、美しい、しかしそれまで、私には住宅の方が感銘がある、中世の家は何故美しいのだろう、今これを建てる気はしない、しかし、この美しくなった原因をつきとめたい、そして美しい町を村をつくりたい、国境をなくさなければならないことだろうか、貧乏の克服が国境にわざわざされている日本、」(在仏日記 1951/3/10)

上記の様に吉阪は留学時の経験を、第二次世界大戦後の社会の一部として強い意識を持ってとらえている事が在仏日記より盛んに読み取ることができる。また戦後社会の中でも特に、戦後復興として要請されていた、集住計画に強い関心を寄せている。以上の事より、本節では、第二次世界大戦後の吉阪の持つ普遍的集住観に対して考察を行った。

吉阪が在室した当時のアトリエル・コルビュジエの仕事は、《マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン》や《ストラスブルグ 800 戸のための設計競技》など、その多くが集住の形を模索する物であった。この傾向は戦後社会の要請の結果であり、必然的に吉阪も集住に関心を寄せる事となった。このような背景の中で、吉阪の集住観はアトリエル・コルビュジエ内のプロジェクトからの学習とフランスの戦災復興都市の観察による学習という大きく二つの経験によって形成されたと考えられる。

吉阪が初めに向き合うことになる集住に関するプロジェクトは《ストラスブルグ 800 戸のための設計競技》である。1951/2/17 から吉阪の仕事となったこのプロジェクトに注力している事が分かる。

「Strasbourg に 10ha 程の敷地に 800 戸を入れる計画の concours あり、7月1日を期限とす、これに過去 20 年の業績を集中したとのこと、まとまった一つの Bloc の全体計画、(見積に至るまで)を行う機会にぶつかったことは何という幸運であろう。」(在仏日記 1951/2/17)

プロジェクトの担当者の一人であった吉阪は、フランス人アトリエ従事者 Fernand Gardien と、ギリシャ人アトリエ従事者 Aristoménis Provelenghios の協力を得て、実際に彼らのパリのアパートメントの調査を行なっている。(図 3-2) その後は、3 日間に渡り、Germán Samper Gnecco と Roger Salmona という 2 人のコロンビア人アトリエ従事者らと共に、現場を視察している。彼らと共にストラスブルグ大聖堂の塔に登り、歴史的な街並みを観察した吉阪は、歴史ある街並みの中にコンクリートの建築を作る方法について思索している。

「Salmona と共に塔に登る、99+199+27 段 (?) テラスにて、更に 173 段、(13 廻転) で鐘より高い廻廊に至る、古い町と新しい町とは色が違う、古い方は《●》形の瓦で黒くくすんでいる、建物の背が痩せ尾根の様に鋭い、新しいはセメント瓦《●》で 45° 勾配位だし、石壁が重たく屋根を乗せてかこんでいる、木造から石造への design の差、こんどこゝにコンクリートのコンクリートらしいものをどうつくるべきか、」(在仏日記 1951/3/12)

更に、帰巴した吉阪はパリ北方にある St Denis という街の集住計画を調査している。これは André Lurçat(1894-1970) という建築家によって計画されたものであり、住区単位の学習のために訪れた事がわかる。以上の事からストラスブルグの計画を経て、吉阪は集住の検討に強い関心を持ち、能動的に学習を進めていたことが分かる。

吉阪は以後いくつかの実践的な集住計画への参画の機会に恵まれる。《マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン》では、1951/9/12 からの 2 週間ほどであったが、現場管理を任されている。更に《ナント・ユニテ・ダビタシオン》では実施設計や多くの作図を担当している事が読み取れる。この事からも、《ストラスブルグ 800 戸のための設計競技》で集住を学び、それをマルセイユとナントのユニテ・ダビタシオンで実践に発展させていったと考えられる。

アトリエでの学びがある一方で、同時に吉阪はフランスの戦災復興都市を訪れ、集住の計画を観察している。吉阪の戦災復興計画への関心は、先行研究^{文 4)}でも指摘されている様に、留学以前から続く物である。^{注 37)}

なかでも、オーギュスト・ペレの計画したル・アーブル計画 (Le Havre) に対して非常に高い関心を寄せている。今回の調査によって、在仏日記からル・アーブル訪問時の記録が明らかになり、更に挿入資料から、それに伴う国際建築誌に寄稿予定だったと思われる未公開原稿が発見された^{注 38)}。吉阪は現地で MRU (再建都市計画省 : Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme) の担当者から直接説明を受け、市内を 2 日かけて調査している。戦災により人口が 22 万から 16 万まで減少し、市の中心部は英軍の爆撃によって壊滅的な被害を受けた

この都市に対する、ペレの集住計画のプランニングを詳細に記録し、戦災復興の可能性と都市計画の重要性を学び取っている。中でも、区画整理事業に強い関心を持っている。国家が国民の生命財産を保証するという事が証明されているフランスの現状に日本との乖離を感じ、また、保証のされ方も興味深く取り上げている。

「直接戦災者に遭っている話を見ると、フランス流に立てつけに不満をならべるけれども、国家は国民の生命財産を保証するということが一応証明されている様に感じられる。日本には非戦災者税があるのだ。(中略)区画整理に土地の交換分合を考えないで、専ら建物の床面積でこれを調節したのであった。地主即家主であるので、しかも商業中心地の地主にとっては土地よりは建物の床面積に利害関係が結びつくことを考え、各街廊毎に一つの戦災者の組合を組織せしめ、この組合の共有財産として土地建物を与えたのである。勿論各戦災者はかつて所有した建物の床面積だけの分を権利として譲られるのである。」(挿入資料より)

戦災復興時に集住の形を選択した際に生まれる土地財産の問題の解決方法として、大きな学びを得ていると言える。更に、この経験が後に彼が提唱した「人工土地」の構想に影響している事も想像できる。

上述した様に、吉阪は留学期にアトリエ ル・コルビュジェ内で多くの集住に関するプロジェクトに関わり、更に戦後社会における復興都市計画と集住の持つ役割に関心を持ち、独自に多くの調査と学習を行なった。この根底には、留学以前から続く生活学や民家調査、その発展としての住居学汎論があり、独自の視点から集住の形を模索していったといえる。また留学後には、吉阪隆正集にも見られるように、人工土地の構想や住まいの形態としての集住への多くの言説が生まれた事からも、留学時のこれらの経験が吉阪の普遍的な集住に対する観性を産んだと考えられる。吉阪における集住への意識はすでに多くの先行研究において指摘されているが、今回の研究によって、その思考の具体的展開を垣間見る資料をここに提示した。

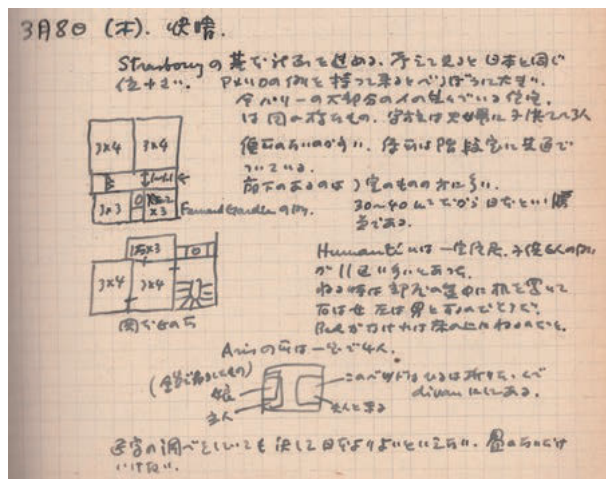


図 3-2 在仏日記 1951/3/8

4. 結論

本研究では、吉阪隆正のフランス留学期における在仏日記を初めて悉皆的に解読した。仏語理論学研究者との協働によって、精密な読み下しが実現され、日記記述の新たな解読を果たしたと考える。

まず、カテゴリ分析によって、在仏日記本文については、記述量の推移とアトリエ ル・コルビュジェ内プロジェクトとの間に相関が見られた。挿入資料については、多様な資料性格を十分に整理し、特筆すべき資料を紹介した。

その上で、吉阪隆正留学期におけるアトリエ ル・コルビュジェ従事者を中心とした彼の人的ネットワークと普遍的集住観の2点について考察を行った。

人的ネットワークでは、アトリエ ル・コルビュジェにおいて従事者として書籍に名前の残っていない人物との交流が複数発見され、同アトリエがこれまで語られているよりも、多様な人物の関与によって活動していた事を具体的に指摘した。更に、在仏日本人との交流については、留学における彼らとの交流の頻繁度を示し、その重要性を指摘した。その上で、在仏アジア人としての吉阪の活動について、アジアを始めとした日本以外の国々の人々との具体的交流の内容と、そこから生まれ得るアジアへの視座を指摘した。

吉阪の「集住観」については、これまで吉阪自身によって語られているが、本研究の成果として、それらの思考の展開過程と考え得る記述を発見した。これにより、留学中における吉阪の集住観はアトリエ ル・コルビュジェ内の活動のみならず、戦災復興都市の観察といったアトリエ外での活動によっても形成された事を指摘できよう。

以上の考察事項は吉阪留学の一側面であり、この他にも彼の人文地理学的感性を垣間見ることのできる旅や、読書・演劇鑑賞といった学習など、留学期における吉阪が獲得した多様な経験を証する記述は多い。これらを今後の課題として、研究を発展させる所存である。

<謝辞>

建築家・白石哲雄氏にはフランスにおけるアトリエ ル・コルビュジェのあり方全般において様々に薫陶を受けた。在仏日記の読み下し成果は川上夏林氏(理論言語学・フランス語学)による言語学的分析と翻訳協力、加えて学生中根伊槻、青木理紗子(共に早稲田大学)の協力によって実現した。記して謝意とする。

<注>

- 1) 《L' Unité d' Habitation à Marseille》 (参考文献 2 より)
- 2) 《Chandigarh. La Naissance de la nouvelle capitale du Punjab》 (参考文献 2 より)
- 3) 《Le Concours de Strasbourg pour 800 logements》(参考文献 2 より)
- 4) 本研究の前身として、以下の発表が存在する。

本橋仁, 廣瀬翔太郎, 中谷礼仁「吉阪隆正の日記帳に関する報告」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 961-

- 962, 2016. 09
- 2015年に吉阪家資料が早稲田大学に寄贈されたのをうけ、その総覧的萌芽的調査を行ったもの。吉阪隆正の日記帳全205冊を対象にした悉皆的な調査を元に、日記資料を三期に分け、各時期の日記の内容を概観して報告した。本研究では本発表の解読結果も活用しつつ、吉阪在仏時の日記解読を継続し内容を発展させた。
- 5) 『吉阪隆正集 8 ル・コルビュジエと私』, 勁草書房, 1985, p. 261
- 6) 帰国日については、倉方俊輔著『吉阪隆正とル・コルビュジエ』 王国社 2005, p. 51を参照
- 7) 手記の記述に関してはテキスト化を行い、時系列順に整理した。複数の協働学生によるテキスト化を行うに当たり、正確な読み下しのためにルールを設けた。①基本的に文字は見えた通りに書き起こし、綴の間違いなどは修正しない。誤字である事が明らかな場合、「見えた通りのスペル《ママ》」と記入する事とした。これは読み下し作業における原本への復元可能性を担保する目的で行った。②判読不能な文字は「■■■■■《推測したスペルや文字》」と表現する。③本文中に図がある場合、その箇所にも《●》を挿入する事で表現する。④濁点や捨て仮名について、日記内には文字の潰れ等により、判断が難しい場合が多く存在する。このような場合には、一貫して文脈から推察することなどはせずに解読者の見えた通りに記述する事とする。⑤吹き出し等を用いて文章が挿入されている場合、【】を用いて、該当箇所に記入する。以上のルールによって統一された解読が可能になった。
- 8) 《«Roq» et «Rob» à Cap Martin》(参考文献2より)
- 9) 《Unité d'Habitation de Nantes-Rezé》(参考文献2より)
- 10) 「Salmonaと共に塔に登る, 99+199+27段(?) テラスにて, 更に173段, (13廻転)で鐘より高い廻廊に至る, 古い町と新しい町とは色か違う, (中略)木造から石造への design の差, こんどこゝにコンクリートのコンクリートらしいものをどうつくるべきか,」(在仏日記 1951/3/12)
- 11) 『吉阪隆正集 15 原始境から文明境へ』, 勁草書房, 1985, p. 205
- 12) 挿入資料 4-13. フランスの新聞誌 L' AUREOLE 誌の記事(日付不明)。記事名「マッカーサーの謎 (L' énigme Mac Arthur)」 JOHN GUNTHER 筆。
- 13) 挿入資料 2-20. パリ国際大学都市の校友会 (ALLIANCE INTERNATIONALE DES ANCIENS) の主催する民俗学に関する講演会への招待状 (1951/11/22) 等。
- 14) 挿入資料 4-16. 在外国ベトナム人留学生協会主催の講演会「L' HABITATION DES POPULATIONS URBAINES (都市人口の住宅)」への招待状。(1951/4/12) (吉阪隆正は「Les Habitations et les Modes de vie au Japon (日本の住まいと暮らし)」という講演を行っている) 等。
- 15) 挿入資料 4-16-2. フランス国立工芸院 (CONSERVATOIRE NATIONAL DES ARTS ET MÉTIERS) で行われた講演会への招待状 (1951/4/25) (吉阪は「日本の住まいにおける伝統からモダニズムへ」というタイトルで講演を行なっている) 等。
- 16) 挿入資料 4-103 より金重業からの言葉を以下抜粋引用する。「なつかしき吉阪(タカ)様 あなたのインドからのお便りを受け取って 皆非常によるこんでゐます。あなたのお陰での時以来ずっとアトリエで働いています。皆非常によい人達です。ここに入って今日で丁度一ヶ月になります。今あなたはまた東京にお帰りになっていないかも知れませんね。実り多き旅をお祈り致します。そして楽しい御返事をお待ちしてゐます。
- 何時お目に掛れるやらわかりませんが お体をお大事に佐藤先生にもよろしくお傳へ下さいませ。又お便り致します。さやうなら 金重業」
- 17) Balkrishna V. Doshi (1927-2023, インド) との記録の存在する 28 日間は以下の通りである。1951/10/16, 1951/10/23, 1951/10/26, 1951/10/27, 1951/10/31, 1951/11/6, 1951/11/8, 1951/11/16, 1951/12/12, 1951/12/13, 1951/12/15, 1951/12/20, 1951/12/29, 1952/1/5, 1952/1/20, 1952/2/25, 1952/3/7, 1952/3/15, 1952/3/22, 1952/3/27, 1952/5/8, 1952/5/31, 1952/6/3, 1952/6/4, 1952/6/10, 1952/7/14, 1952/7/19, 1952/7/26。
- 18) Iannis Xenakis (1922-2001, ギリシャ) との記録の存在する 25 日間は以下の通りである。1950/12/4, 1951/1/13, 1951/2/23, 1951/5/30, 1951/6/1, 1951/6/24, 1951/7/23, 1951/8/3, 1951/8/7, 1951/9/4, 1951/9/10, 1951/10/21, 1951/10/23, 1951/11/22, 1951/12/19, 1951/12/20, 1951/12/29, 1952/2/2, 1952/2/25, 1952/3/15, 1952/3/22, 1952/5/20, 1952/6/3, 1952/6/4, 1952/8/24。
- 19) Germán Samper Gnecco (1924-2019, コロンビア) との記録の存在する 21 日間は以下の通りである。1950/11/18, 1951/1/3, 1951/1/5, 1951/1/13, 1951/1/31, 1951/2/7, 1951/3/9, 1951/3/12, 1951/5/1, 1951/5/4, 1951/5/28, 1951/6/21, 1951/8/24, 1951/8/27, 1951/10/20, 1951/10/26, 1951/11/14, 1951/11/18, 1951/11/24, 1952/1/9, 1952/3/7。
- 20) Aristoméni Provelenghios (1914-1999, ギリシャ) との記録の存在する 19 日間は以下の通りである。1950/10/26, 1950/10/31, 1950/11/18, 1950/12/4, 1951/3/8, 1951/3/28, 1951/4/16, 1951/4/30, 1951/5/19, 1951/5/21, 1951/5/23, 1951/5/26, 1951/6/25, 1951/6/30, 1951/8/1, 1951/9/4, 1951/9/11, 1951/10/10, 1952/3/5。
- 21) André Wogenscky (1916-2004, フランス) との記録の存在する 18 日間は以下の通りである。1951/2/26, 1951/2/27, 1951/3/28, 1951/5/19, 1951/5/26, 1951/6/30, 1951/9/18, 1951/9/20, 1951/10/8, 1951/10/29, 1951/10/31, 1951/11/8, 1951/11/17, 1951/11/22, 1951/11/27, 1951/12/19, 1952/5/20, 1952/8/24。
- 22) 『吉阪隆正集 8 ル・コルビュジエと私』, 勁草書房, 1985
- 23) 「Samper 夫妻, Vieco, Valentia らと別れ, Salmona と共に Strasbourg に戻る, (中略) Salmona の話によると, Colombia の民家は図の様になつていて, カメは大きな建築的役割をなしている由, 中には壁がわりにカメをならべ, 中に雨水をたくわえる所もある由, もう一つの様式はスペインのバシオ形式である,」(在仏日記 1951/3/12)
- 24) 「Humanité には一室住居, 子供 6 人の例が 11 区に多いとあつた, ねる時は部屋の真中に机を置いて右は女左は男とするのだそうだ, Bed がなければ床の上にもねるのだと, Aris の所は一室で 4 人, 民家の調べをしても決して日本よりよいといえない, 畳のないだけいけない,」(在仏日記 1951/3/8)
- 「ひるから, Aris の所, (中略) 二人の子供らと共に 3×4m の部屋の中での過密居住, 大久保を思い出す混雑,」(在仏日記 1951/5/26)
- 25) 「Nante のアパートの研究, 南面の処置が決つて大分進む, しかし立面は少し気に食わぬ, Wog 案, tracé regulateur の掲か? Doshi と tracé について論ず, 彼も tracé の理論的根底を疑う」(在仏日記 1951/10/31)
- 26) Noël (詳細不明) との記録の存在する 7 日間は以下の通りである。1952/3/9, 1952/6/7, 1952/7/14, 1952/7/15, 1952/7/17, 1952/7/20, 1952/7/23。
- 「午後の汽車で帰巴, 9時半から Doshi, Scheiber も一緒に Noël, Madeleine, Héleine らと Pont Neuf へ花火を見物に, それより Tuilerie-Concorde-Bastille-Place d'Italie-帰宅,」(在仏日記 1952/7/14)
- 27) Mme Jeanne (? , フランス) との記録の存在する 3 日間は以下の通りである。1951/2/27, 1951/5/21, 1951/12/22。

- 「夜 Corbu 夫人に招かれ、この前と同じ途を Café de Flore から St Benoit に至り、rue de Renne の Rose Rouge がしまつていたので Club St germain の eaveau で 2 時頃までダンス、Mm Jeanne, Jasmine, Aris, Afonso とその恋人、(Valentia は早く帰る) の一行、」(在仏日記 1951/5/21)
- 28) Charles Barberis (1888-1980, フランス) との記録の存在する 2 日間は以下の通りである。1952/3/7, 1952/3/10。
「Barberis が来て、Pan de Verre の細かい注意を聞く、これは貴い教訓、鎌倉の美術館が雨もりで困っているというのを聞くとなおさらである、夜おそくまで間仕切りや天井について Barberis と共に検討、」(在仏日記 1952/3/7)
- 29) Vedat Ali Dalokay (1927-1991, トルコ) との記録の存在する 2 日間は以下の通りである。1950/10/31, 1950/11/28。
「9 時 Sèvre 35 番館に入ると、Gardien 君と Ali 君がいるやかで André 君や Aris 君、あとはまだ一寸名を覚えられなかつたが集る、タ・ミの一席をやる、今までやつていたいろいろな研究を聞く、」(在仏日記 1950/10/31)
- 30) Vieco (Hernán Vieco Sánchez か。) (1924-2012, コロンビア) との記録の存在する 1 日間は以下の通りである。1951/3/12。
「教会の簡単プランを見とり、18 時のガソリンカーで Gare に至り、Samper 夫妻、Vieco, Valentia らと別れ、Salmona と共に Strasbourg に戻る、」(在仏日記 1951/3/12)
- 31) Costantine Andréou (1917-2007, ブラジル) との記録の存在する 1 日間は以下の通りである。1951/6/24。
「昨日一日さぼつたので、Atelier に行く、ひるめしを Xenakis, Andreou と共に近くの Rest. にて、」(在仏日記 1951/6/24)
- 32) Claude Le Goas (1928-2007, フランス) との記録の存在する 7 日間は以下の通りである。1951/5/29, 1951/11/14, 1951/11/20, 1951/11/24, 1951/12/8, 1951/12/15, 1952/1/19。
「夜、CEPA へ久し振りで行く、CIAM 批判、Goas 氏の意見: CIAM は近代建築に革命を与えた、その出発点は、人間であり、人間と自然の調和にあつた、しかし、その後その扱つた人間は抽象化し、静的な、非社会性の世界人であるとなつた、1928 年ラサの会議の時には、機械文明によつて覆かえされて世界の再建を求めていたのか、1937 年、L-C は、人間の基本的要求、宇宙のはじめから必要としていたものを与えることによつて解決を与えよう、として、太陽、空気、緑を見出した、しかし社会人としての人間は忘却された、それは CIAM が資本主義発展乃至黄金時代に育つたこと、1929 年の恐慌を通じてもそれはまだ弱らなかつたこと、しかし大衆を問題にしていた為、資本家にもプロにもあてはまるものを求めた結果が人間の抽象化としてあらわれたと見ると、どちらにも共通的なもののみがとりあげられたのであつた、(中略) CEPA としては、CIAM 批判に基き、今後とるべき態度についてのパンフレットをまとめて、議論の種にしようという案あり、参加することにする、これは建設的であるから、(ヒル、Samper と CEPA は破壊を理論に■くつていと非難したのであつたが)、」(在仏日記 1951/11/14)
「Goas の所に行き、Samper, Salmona, Valentia らと共に CIAM 批判の草稿をねる、」(在仏日記 1951/11/24)
- 33) 秋山光和 (美術史、国立博物館研究員、当時 32 歳)、北本治 (医学、東京大学助教授、当時 38 歳)、田中希代子 (ピアニスト、当時 18 歳)、森有正 (仏文学、東京大学助教授、当時 38 歳)、八木康夫 (生物化学、名古屋大学助教授、当時 28 歳)
- 34) 「午前中は描きたくてたまらず、半日 Deutsch のそばで坐つて Chalet du Parc を油でやつて見る、(中略) すみからすみまで力が要つて、スケッチとは大分心持が違う、気永なものである、

私にはよい修着である、楽しい修着、(中略) 荻須さんのマネをして見るが、筆がいうことをきかない、吉川氏に見せたら、水彩くさいといわれた、荻須さんの特意とする所は固有色を生かしたことで、光を殺している所にある、そういう意味では屋根だけは成功していると、」(在仏日記 1951/4/1)

- 35) 「午前中を Bibliothèque Nationale で過す、やはりフランス住宅を何とか曲りなりにもまとめて帰らねばと思い再び中休みののちに取り上げる、André Allix の Oisans の住宅だけを読む、(中略) Corbu の所で Strasbourg のアパートの断面を描く、安くする為に■■■■■■■■ double を止めるか止めないかが論議される、(中略) atelier の連中にいわせると Corbu は自分のことしか考えないという、だから非常に sec だと、この頃再び sec になつたといつている、確かにそんな感じがするが、印度の計画に熱中している気持はわかる、夕食後、北本氏の所により、Asada 女史のつくつてくれた羊羹を食べる、(中略) 宮本氏と共に専ら■■■■■■R. Rolasal の手紙の話がでる。手紙の文学の傳統はこちらには相当に強い、儀礼的でない所から生じたものだといわねばならぬ、」(在仏日記 1951/4/17)
- 36) 挿入資料 4-16-1 を参照。
- 37) 11 名の従事者は Balkrishna V. Doshi, Iannis Xenakis, André Wogenscky, Georges Sachinidis, Roger Salmona, Jacques Masson Jacques Michel, 金重業, Mme Jeanne と 2 名の不明な人物である。
- 38) 吉阪は 1945 年から 1950 年にかけて、住宅・都市関係を中心に多数の研究會等に参加している。中でも、「銀座消費觀興地区計画」では、吉阪が中心となつて計画案を提出している。
- 39) 挿入資料 2-11 より

<参考文献>

- 1) 福田京「アトリエ・ル・コルビュジェにおける吉阪隆正のプロジェクト担当箇所の特定と考察 -設計図面及び日記の調査をとおして-」東京理科大学卒業論文、2007
- 2) W. Boesiger 「Le Corbusier Œuvre complète 1946-1952」, Les Editions d' Architecture Zürich, 1955
- 3) 倉方俊輔著『吉阪隆正とル・コルビュジェ』王国社 2005, p47-51
- 4) 倉方俊輔、山名善之「吉阪隆正の住宅・都市理念に関する研究」、住宅総合研究財団研究論文集 34 巻, pp. 361-372, 2008
- 5) Le Corbusier 「Architecture du bonheur, L'Urbanisme est une clef」, Forces Vices, Les Presses de l'Île de France, 1955
- 6) Petit Jean 「Le Corbusier lui-même」, 1970
 - ・吉阪隆正全集 17 巻, 勁草書房, 1985
 - ・倉方俊輔著『吉阪隆正とル・コルビュジェ』, 王国社, 2005
 - ・本橋仁, 廣瀬翔太郎, 中谷礼仁「吉阪隆正の日記帳に関する報告」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 961-962, 2016. 09
 - ・福田京, 島崎絵里, 谷川大輔, 山名善之「アトリエ・ル・コルビュジェにおける吉阪隆正のプロジェクト担当箇所の特定と考察 -設計図面及び日記の調査をとおして-」, 日本建築学会大会講演梗概集, 2008

<研究協力者>

- | | |
|--------|-------------------------------|
| 川上 夏林 | 東京外国語大学非常勤講師 |
| 青木 理紗子 | 早稲田大学大学院創造理工学研究科
建築学専攻修士課程 |
| 中根 伊槻 | 早稲田大学大学院創造理工学研究科
建築学専攻修士課程 |